「流れていく歴史」を持つ日本人

列島保全への課題

日本人を育んだ国土の地理的条件・自然条件⑦

時間は災害とともに流れ去る

テレビの歴史番組などでは「歴史は大河のようである」と説明することがあるように、われわれ日本人は「歴史とは流れていくものである」と考えている。

まさに、『方丈記』の「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし」という感覚なのである。ところが、ヨーロッパにはそのような感覚はない。

洪水や地震で街が消滅

日本全国ほとんどの地域で起こりうる阪神淡路大震災級の地震は、一瞬にしてすべてのものを破壊する。長年かけて大事に保全してきた由緒ある建造物も、橋も港も、ほとんどが崩壊に至るか、機能不全に陥る。

東京、大阪、名古屋など大都市はすべて大河川の河口部に存在するから、気まぐれな豪雨によって、ヨーロッパの洪水などとの比較でいえば、瞬時にといってもいい速さで河川水位は上昇し、街のすべてが押し流されたり、床上まで浸かったりする。

大災害を経ることで、この国では過去は現在や未来につながらない。努力の成果であったり、思い出深いものであったりする過去は、流れ去り崩れ去って現在に至らない。時間は災害とともに流れ去ってしまうのである。

ヨーロッパでは、ダ・ヴィンチ、ニュートン、ルソー、モーツァルトの生家が今も現地に姿をとどめているのに、わが国では彼らと同時代に活躍した人々の生家など、跡形もなく消失しており、現在は存在しない。

この国ではまさしく、うたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまらないのだ。ところが、地震も台風やハリケーンの大風もなく、洪水もおとなしい彼らの国では、時間は積み重なっていくものであり、歴史は積み上がって街にあふれている。

1851年に、地球が自転していることを、ビジュアルに見せることに見事に成功したフーコーの振り子は、いまもパリに建っている「あのパンテオンの中で」揺れていたのである。

あるのはそのパンテオンだけではない。現在のパリの市民は、1851年にはすでに存在していた、あふれるほどの建物の隣で暮らしていることを自覚している。パリの街区割や多くの町並みは、この頃に活躍したナポレオン三世によるパリ改造の姿を、ほとんどそのままとどめているのである。

ミケランジェロのダビデ像（左端＝レプリカ）などルネサンス以来の彫刻とヴェッキオ宮殿に囲まれたシニョーリア広場一帯は、古都の面影が残るイタリア・フィレンツェの旧市街の中心

欧州は「積み重なる歴史」

「流れる歴史」を持つ民族と「積み重なる歴史」を持つ民族の違いは大きい。きれいさっぱり流れてしまって、改めて造り直さなければならない民と、流したくとも積み重なってこびり付いているものの拘束から解放され得ない民の違いは大きい。積み重ねてきたものに拘束された世界からは、容易に「積み重ね」を大切にする文化が生まれる。

ヨーロッパの諸都市は第二次世界大戦の復興過程で、少なくとも表通りについては「昔の景観に戻す」ことを原則としたとのことである。ローマでは街中のほとんどの建物が建て替えは御法度で、ビルの設備が近代化していくときに、きわめて不便で不合理なのに、頑張って昔の建物を何とか使いこなしている。

光ファイバーを入れることなど想像もしていなかった時代の建物を、高速通信がなければ成り立たない現代企業に使わせるには、苦労も多いことだろうと同情を禁じ得ないが、イタリアではこの使いにくい首都にこだわって、遷都論などあり得ないというのだから、なるほどわれわれと彼らはかなり違う。

ところがこちらは、いつかは流れ、いつかは崩壊する運命にある建物であるから、惜しげもなく建て替えて、良心の呵責におびえることもない。

川と城壁に囲まれた天然の要害トレド（スペイン）の旧市街は、中世以来の歴史的住宅がそのまま残る

違いとして認識する

森鴎外は明治に、この国は「普請中」であると形容したが、明治に限定した話ではない。受け継ぎ、引き継ぐべき景観の意識もないから、東京などでは何年か経つと、ここはどこだろうと戸惑うほどに変貌を遂げることにもなる。

この違いは、善悪や価値の上下ではない。違いは違いとした認識が必要だということなのである。

国土が日本人の謎を解く

大石久和著

本書は、わが国の地理的条件・自然条件だけでなく、われわれ日本人は何を経験し、何を経験しなかったのか？それはヨーロッパやアメリカ、中国の人々とどう異なっているのか？について学ぶことの出来る好著。

発行：産経新聞出版
定価：1300円＋税